

発表者 岡本 淳之

テーマ 「一人ひとりの多様性を認め合い、個性を生かす教育」

ご紹介ありがとうございます。岡本淳之と申します。とても大事なテーマだと思いました。とてもワクワクしながら考えました。

言葉の意味を整理してみました。一人ひとりですから、公立、地域の全ての子どもになると思います。誰一人見捨てられません。全ての子どもです。

多様なのですが、企業ではよく女性や外国人の割合といわれますけれども、それももちろん大事なのですが、そもそも全ての人には個々に人格があるということだと考えました。当たり前ですが、子どもも含めて人は一人ひとり違うということなのです。

認め合う。その全ての人には個々に人格があるということを互いに認識することだと考えます。自分も大切だし、他者も大切。自他を大切にすること意識をもとに学び、生活し、社会を構築していくことだと考えました。

そして、個性を生かす教育、ここは実は一番難しいと思います。個性とはその人特有の性質です。一方で、学校教育とは、社会を維持していくための機能です。人の社会性を育成することが主な役割です。学校教育が個性尊重と社会性育成のどちらに重きを置くのかについては、古くから議論のあるところなのです。

人は社会で生きていますから、学校ではそのために必要な知識を得て、社会性を育みます。他方で、社会性育成を優先し過ぎると、学校に適應できない個人がよろしくないということになりかねません。それが不登校、やがては引きこもりなど、社会不適應につながっていく可能性もあります。

だから、どちらでも、どちらかではないと私は思います。どちらも大事です。多様性のところで言いましたが、自分を大切にすること、そして、他者を大切にすること、個性尊重と社会性育成の両方が含まれています。

高度経済成長期には、人と同じことができることが評価されました。でも、これからは大量に同じものをつくっても売れません。創造的で革新的な発想ができる、人と違うことを考えられることが評価される時代です。

違う考えを持つ、多様な個人で社会を維持していくためには、人は異なる考えを持っているということを前提として対話をしなければなりません。対話は議論ではありません。勝ち負けではなく、相手の意見を聞いて自分の考えを深めていくプロセスに意義があります。正直、しんどいと思います。でも、対話を通じて関係者間で納得解を見出し、よりみんなが幸せに安心して暮らしていける社会を私たちはつくっていかなければならないと思います。

学校で子どもたちが対話を学ぶことができれば、それがこれからの社会性の育成となると思います。

その上で具体的な教育の姿を考えました。前提として、「できることから」を基本としたいと思います。先生、校長先生や副校長先生、行政の方々、保護者、誰かが無理をして回す仕組みは破綻します。持続可能なものでなければみんなが幸せになれません。そして、関係者で対話をしていくプロセスも大事にしたいと思います。

3つ考えてみました。1つ目。やらされる教育から自分でやる教育へシフトしていきませんか。我々大人もやらされる教育を受けてきました。大人がここからここまで、このように勉強してと決めた教育です。でも、ほとんどの人はその内容を忘れていていると思います。

また、これからは本当に予測不可能な時代です。大人がこれを教えておけば大丈夫と子どもに確定的なことが言える時代ではありません。それなら、自分で興味を持って自分で取り組める教育にシフトしてもいいのではないのでしょうか。興味を持てるからこそ主体的に学び、自分の核として残ります。自分に合った学び方を学べます。学び方を知っている人がこれからどのように社会が変化しても、その都度自分で学び生き残っていくことができます。探究的な学びと呼ばれるものです。

また、これは学校の先生方にとっても同じです。先生方も多くの教育課題へ対応させられています。多くの「〇〇教育」が下りてきて、やらされています。人にやらされるばかりでは主体的になれません。現場の先生方が自校で何が必要かを考え、子どもや保護者、地域、行政の方々と対話をし、自校の教育を形づくっていければよいと考えます。

2番目、指導文化を考え直してみませんか。指導とはやらせること、強いることです。できない人にできるようになるまでやらせるし、でも、できないことの原因は人それぞれあります。人の目を見て大きな声で挨拶ができない人もいます。できない人にみんなと同じことをやらせ、強いることを続けていると、その人の人格が損なわれます。反発するかもしれませんし、劣等感を持ってドロップアウトにつながるかもしれません。

皆と同じことができなくても、生きていける社会が多様性が認められた社会です。指導ではなく、人それぞれが幸せに生きていけるよう、支援する学校文化を意識してもよいのではないかと思います。

3番目。学力向上から少し距離を置いてみませんか。学校に学力向上のプレッシャーがかかっています。都内ではこれくらい、区内ではこれくらいと順位が決められています。でも、その学力調査の上があった、下がったは、個々の子どもの人生にどれだけ影響しているのでしょうか。コロナ禍で主体的に学び、自分で考え行動できる人の必要性が強く認識されました。学力調査の点数を気にするよりも、主体的に学び、自分で考え行動できる人を育てていくほうが、中野区はもっとみんなが豊かに、幸せに暮らしていけるのではない

かと思います。

最後です。私は中野のいいところはまさに多様性だと思っています。数年前、サンプラザのビアバイキングに家族で行きましたら、アニメの女性キャラクターのコスプレをした中年男性の集団がいらっしゃいました。私は「中野はめっちゃいいところだな」とすごく感激しました。誰もそれを邪魔しない、多様性を認め合うことは、中野だからこそ実現できると思います。以上です。

区 長 とても分かりやすいプレゼンをありがとうございました。個性尊重と社会性の育成のバランスというのをどうとるかということ、聞きながら私も考えたのですけれども、対話の教育でそのバランスを探っていくのだろうなというふうに理解をしました。今、働き方改革といわれています。特に教員の世界は深刻な状況だなと思っているのですけれども、これはどうやったら解決できると思いますか。

岡 本 まず第一は先生がやること、先生以外の方がやることを仕分けすることです。そこが国も、中教審も言っていましたし、また、区としても出されたと思うのですけれども、結構地域性があると思うのです。伝統、文化、我々はどうしてきたからといってなかなか自分からは手放さない、地域からも求めるという、そういったところを、対話を通して丁寧に解きほぐしていくしかないのかなと思います。学校がこうしたいと言っても地域が駄目だと言えばそれでおしまいなのです。

区 長 私は、自分でやる教育、自分で進んで学ぶということが大事だと思っているのです。それは今、学校の先生たちも多分やろうとしている人もいるのだろうと思っているのですけれども、これを各学校でやってもらうためには、どういうふうに進めていけばいいと思いますか。難しい質問かもしれないのですけれども。

岡 本 プロジェクトベースラーニングとか、また、あと、学校種別で言うとイェナプランスクールなど、いろいろ各地でそういった探究的な学び、自分でやる学びというのは、蓄積がかなりあります。それをあとはどうやってやるかどうか次第だと思うのですけれども、そこも先生たちが下りてきたものをやれと言われるのでは、形骸化してしまうと思うのですよね。先生たちがまずは探究

的に自分たちの仕事を振り返り、こういう授業がしたい、子どもたちと一緒に成長したいと思えるような場をつくること、それが大事なかなと思います。

区 長      あと1点。岡本さんはお仕事柄、日本全国の学校の特出した例とか、卓越した成果とかという事例もご覧になっていると思うのですけれども、その現場でできたことというのは、キーポイントはどこにあったと思いますか。

岡 本      キーポイントは、ちょっと前でしたらリーダーシップのある教育長、校長先生がこれをするのだ、先生たちをうまく乗せて実現しましたというのがドーンと出ることはありました。ちょっと前、民間人校長ブームとかもありましたね。それですと、やはり全国に広まりません。あそこはできるけど、うちではできない、あそこだからできたになってしまう。そこを、結局同じなのですけれども、自分たちでやるしかないです。先生方が、自校でどう実現できるかを考える、そこにいかに持っていけるかだと思います。

区 長      ありがとうございます。